

起源からの流出／誕生、ペルソナと固有性

— ボナヴェントゥラの「生むゆえに、御父である」に関して —

平 野 和歌子

1. はじめに

キリスト教の教理「三位一体」について、一なる神であると同時に三つのペルソナ（persona）があることは、いかにして整合的に考えられうるのか。これは、キリスト教思想史ではニカイア公会議（325）をはじめとした数多の場で、数多の思想家らによって論考が重ねられてきた問題である。今なお影響力の残る Théodore de Régnon による研究が指摘するように⁽¹⁾、神の一性とペルソナの区別とが両立するような説明を、明解で美しく提示することは、思想史を振り返っても容易ではなかった。結局、一性もしくはペルソナの区別のいずれか一方に、説明の重心が偏ってしまうことが多かったのである。教父アウグスティヌス（354-430）は、西方教会の流れの筆頭として教理の確立に貢献したとされるが、de Régnon が批判する通り、一性の強調に傾きがちであるだろう⁽²⁾。その理由の一つとして、アウグスティヌスには、ペルソナとその固有性（proprietas）との関係——例えば御父のペルソナ（persona Patris）と父性（Paternitas）との関係——を考えるという着想がなかったからだと、論者は推察している。そのせいで、「御父＝神〔神の実体／本質〕」「御子＝神〔神の実体／本質〕」「聖霊＝神〔神の実体／本質〕」のように、各ペルソナが神の実体〔本質〕と一性をなすことは明言されるが、ペルソナの違いを根拠づける各固有性については、十分な考察がなされなかった。

時が進み、ペルソナと固有性に関して、明確な問題意識をもって論考されるようになるのは、11 世紀後半ないしは 12 世紀頃からである。すでにアウグスティヌスもアリストテレスのカテゴリー論を三位一体論に活用していた

が、12世紀頃にはペルソナと固有性の関係に関してそれを応用する傾向が進んだと考えられる。なかでも、ギルベルトゥス・ボレタヌス（1076-1154）は実体と属性の理論を、神〔神の実体〕と神性にだけでなく、ペルソナと固有性にも適用し、ペルソナがいかなる仕方で固有性を有するかを説明しようとした⁽³⁾。ボレタヌスの三位一体論は結果的に異端の嫌疑をかけられることになったが、後続の者らが無視できないほどの影響力をもった。事実、本稿で取り上げる13世紀の思想家ボナヴェントゥラ（c.1221-1274）もまた、ボレタヌスの見解をもち出しており、ペルソナと固有性の関係の観点を認知している。

さらに研究者の間では、ボナヴェントゥラの三位一体論の特徴は「起源（origo）」を基軸に展開するところにある、という解説の仕方が既定路線となっている。起源からの流出〔発出〕——御子の誕生と聖霊の発出を含む——に基づくところに、新プラトン主義的な特徴が認められる。ボナヴェントゥラはこの特徴を、偽ディオニュシオス・アレオパギテス（c.480）やサン・ヴィクトールのリカルドゥス（c.1110-1173）、そして師のヘールズのアレクサンデル（c.1185-1245）から引き継いでいる。このような新プラトン主義的な系統は、アリストテレスをより積極的に活用するトマス・アクィナス（c.1225-1274）としばしば対比される。その典型的な違いは、御父からの御子の誕生に関する、次のような見解に顕著である。トマスの場合は「御父であるがゆえに、生む（*quia Pater est, generat*）」と答え、御父の存在が生む働きよりも、理解の上では先行すると考える。それに対してボナヴェントゥラは、「生むゆえに、御父である（*quia generat, est Pater*）」と答え、御父の存在よりも、起源からの産出の方を優先させる。そのためこの見解には、起源の重視というボナヴェントゥラの方針が表れているとされる。ただし加えて二者の見解の違いは、ペルソナがいかなる秩序で固有性を獲得するのかという問いに関しても、その解答を左右するはずである。なぜなら、御父は生む働きのどの段階で、ペルソナとして成立し、固有の父性を獲得するのか、という問いに換言できるからである。要するに、ボナヴェントゥラによる起源を

基軸とする三位一体論の組み立て方は、ペルソナと固有性についての考え方とも、密接に関連すると考えられる。

したがって本来、(a) 起源の観点と (b) ペルソナと固有性の観定の両者を同時に考慮した上で、ボナヴェントゥラの三位一体論の構造は解明されねばならない。しかしながら、後に見るように 13 から 14 世紀の三位一体論に関して有益な研究を残す Russell Friedman でさえも、トマスと比較しながらボナヴェントゥラの独自性を取り出す際に、結局は (b) の観点を (a) の観点へ短絡的に還元し、(b) の観点を軽んじている⁽⁴⁾。先行研究の路線の通り、確かにボナヴェントゥラは起源を基軸に考え、新プラトン主義的な流出論を三位一体論に適用している。ただ Cullen も評価するように、ボナヴェントゥラは新プラトン主義的な伝統を引き継ぐ一方で、アリストテレスを取り入れながら独自の三位一体論を構築しており⁽⁵⁾、ペルソナと固有性についても問題意識をもっている。そのため、一なる起源から流出する仕方で「生むゆえに、御父である」との見解を採るという紋切型の説明は、論者にはあまりに単純化し過ぎているように見える。むしろ私見では、新プラトン主義的な流出論に関わる (a) の観点と同時に、アリストテレスのカテゴリー論解釈を通じて養われた (b) の観点が並行的に考慮されている。ボナヴェントゥラは (a) と (b) の観定の整合性を取りながら三位一体の構造を論考した末に、トマスとは違う、オリジナルな見解に至ったのではないか。

そこで本稿では、ボナヴェントゥラの『命題集註解』をもとに、「生むゆえに、御父である」が示す三位一体の構造を、(a) だけでなく (b) も含む観点から検討する⁽⁶⁾。それによりボナヴェントゥラが、起源からの発出を動的で重層的な仕方で捉えながら、各ペルソナの固有性も保持されうる構造を提示していることが明らかになるだろう。そしてその構造の解明は、次の二点に関しても、明るい見通しが得られる可能性がある。一点目は、ボナヴェントゥラが新プラトン主義とアリストテレスの両者を、どのようにバランスよく取り入れながら、独自の三位一体論を構築しているのかという問いに対して、ひとつの解答を得ることである。二点目は、西方教会の系譜ではペル

ソナの区別が捨象されてきたという批判を de Régnon らから受けてきた要因は、先行研究において (b) ペルソナの区別と固有性の観点が軽んじられてきたためである。そのため (b) の観点に着目することで、de Régnon らの批判に対して、見直しを迫りうる可能性がある。

2. ペルソナについての基本的な規定

ボナヴェントゥラによれば、ペルソナは「固有性 (proprietas) によって区別され、尊厳 (dignitas) にかかわる主体 (suppositum)」と規定される⁽⁷⁾。これは、ボエティウスによるペルソナの規定「理性的本性を有する個の実体 (naturae rationalis individua substantia)」を継承しながら、加えてサン・ヴィクトールのリカルドゥスや、ボナヴェントゥラの師ヘールズのアレクサンデルからも影響を受けている⁽⁸⁾。彼らの解釈を引き継ぎ、「尊厳」とは理性的本性を有することを指す。理性的な存在が、尊厳のある「高貴な」存在とされる。さらにボナヴェントゥラの規定では、この理性的な「主体」に対して、「固有性」による区別が付加される。すなわち、この規定は「区別される者 (qui distinguitur)」と「それによって区別されるもの (quo distinguitur)」という二観点から成る。前者の「区別される者」は「主体」に依拠しており、後者の「それによって区別されるもの」とは「固有性」である。

もし私たちが三つを理解するなら、「区別される者」と「それによって区別されるもの」を必然的に理解している。「それによって区別されるもの」とは、固有性である。「区別される者 (qui distinguitur)」とは distinctus として常に意味表示される。これは二様による。「何であれ固有性によって区別される者」としてか、「高貴な固有性によって区別される者」としてかである。前者は「スブシステンティア (subsistentia)」と呼ばれ、第一実体である。これは個々の人間だけでなく、ロバにも適合する。後者は、高貴な固有性を含意しているので、

ペルソナが意味表示される。これは理性的被造物の「主体」にしか適合せず、この代わりに私たちがペルソナの名称で呼ぶように、ギリシア人たちは「ヒュポスタシス (hypostasis)」の名称で呼んでいる⁽⁹⁾。

ここから、「スブシステンティア」と「ヒュポスタシス」は、理性的本性を有するかどうかの違いはあるが、区別された個という点で、ペルソナと同じものを指す。さらにボナヴェントゥラによれば、区別された個は「主体」としての基体に依拠しており、ペルソナから「ヒュポスタシス」や「主体」を分離することは不可能である。それゆえ「主体」とそれに依拠する「ペルソナ」は、「区別される者 (qui distinguitur)」ないし「distinctus」と表現される。他方で「それによって区別されるもの」である「固有性」は、特定のペルソナに属しながら、そのペルソナを超え、他のペルソナとの関係において生じる。そのためボナヴェントゥラは、後述するように⁽¹⁰⁾、ペルソナと固有性がある条件下では分離可能なものとして捉える。事実、ボナヴェントゥラは「ペルソナは主体やヒュポスタシスを意味し、[他方で] 固有性は他への関係づけ (habitus ad alterum) を意味する」と述べており⁽¹¹⁾、ペルソナは個的な基体としての「主体」と殆ど同義だが、それと「固有性」を分けて理解する。このようにペルソナの規定が二観点からなることを、ボナヴェントゥラは (a) と (b) の観点から三位一体論を展開する際にも、基本的に意識している。

なお、上述のペルソナの規定に関わる概念は、一なる神自体の「本質 (essentia)」や「実体 (substantia)」といった概念とも同義ではない。三位一体の正統な定義においても勿論、父・子・聖霊は、神の本質や実体と一性をなすが、ペルソナとしては区別される。ボナヴェントゥラによれば、本質は「それによって一なるもの (quo est unum)」であり、実体は「一なるもの (quod est unum)」である。概念上では「神性 (Deitas)」と「神 (Deus)」は分けられ、前者は抽象的な「quo est」、後者は具体的な「quod est」であり、神性によって神であるとされるように、神の本質と実体についても同様の見

方の違いが取り抑えられている⁽¹²⁾。この「quo est unum」と「quod est unum」が、上の引用箇所では、ペルソナと固有性についても並行的に「quo distinguitur」と「qui distinguitur/ distinctus」と理解されていたのである。Paul Thomによれば、このような並行的な捉え方の背景には、ギルベルトゥス・ボレタヌスの影響がある。その影響の検討は別の機会に譲るとして、本稿のためには、神の本質と実体についての見方と並行的に、ペルソナと固有性も捉えられていることを抑えれば、ひとまず十分だろう⁽¹³⁾。

ここまで確認した通り、ボナヴェントゥラはペルソナを「主体」と「固有性」の二観点から規定している。そのため、三位一体の「関係」が論じられる際に、単に御父と御子の二者間の関係を外から眺めるだけでなく、御父自体の内部についても「主体」と「固有性」を識別しなければならない。それを前提にした上で、ボナヴェントゥラは「生むゆえに、御父である」との見解を採っているのだが、この見解において (b) ペルソナないし主体と固有性の観点がどのように捉えられているのかに関しての研究は、さほど注目されてこなかった。それがゆえに、ボナヴェントゥラの見解には難しい問題があるとの批判を受けてきた。そこで (a) (b) の観点の検討に移る前に、次章ではこの見解にいかなる難点があるのかを確認する。

3. 「生むゆえに、御父である」の問題点

三つのペルソナは、個別の主体として存在し、固有性によって区別される。それでは原因の秩序の上で、ペルソナと固有性はいずれが先にあるのか、あるいは同時なのか。この問いへの解答は、ボナヴェントゥラの「生むゆえに、御父である」という立場とも関連する。それをより明瞭に理解するために、まず比較としてトマスの見解を概観する⁽¹⁴⁾。トマスは「御父であるがゆえに、生む」との見解を採る。その際、「ペルソナと固有性は、概念的 (ratio) には異なるが、事柄 (res) の上で同一」であり、「固有性はペルソナにおいてあり、固有性はペルソナである (proprietas esse in personis, et eas tamen

esse personas)」と述べ、ペルソナと固有性が同一であると主張する。

神の単純性ゆえに、被造物においては異なることについての、二重の実在的同一性がある。すなわち、神の単純性は形相と素材の複合を排除するゆえ、神において抽象と具体は同一であることが帰結する。それは、「神性 (Deitas)」と「神 (Deus)」が同一であるようなものである。他方で、神の単純性は基体と付帯性の複合を排除するゆえ、神に帰属されるものはすべて、神の本質であることが帰結する。…同一性についてのこれらの二重の理解に即して、神における固有性はペルソナと同一である。事実、「ペルソナ的な固有性 (proprietaes personales)」がペルソナと同一であるのは、抽象的なものと具体的なものが同一であるという理由による。[ペルソナ的な固有性は]「自存するペルソナ自体 (ipsae personae subsistentes)」である。それで、父性は御父自体であり、子性は御子であり、発出は聖霊である。他方で、ペルソナのでない固有性がペルソナと同一であるのは、同一性についての後者の理由、すなわち神に帰属することはすべて、神の本質であることに即してである⁽¹⁵⁾。

ここからトマスもまた、抽象的な「神性」と具体的な「神」が、神において同一であると考え、それと並行的に、固有性とペルソナも抽象と具体の関係として捉えている。ただしトマスは、固有性とペルソナが神において同一であることをより強調し、固有性が伴わずしてペルソナは存在しないと考え、固有性は「自存するペルソナ自体」であると言う。それゆえトマスは「区別するもの」自体が「区別されるもの」を構成しなければならない。関係ないし固有性は、「自存するペルソナ」である限りで、ヒュポスタシスないしペルソナを区別し構成するようにして、父性は御父である」と述べている⁽¹⁶⁾。つまり父性は、御父の存在を構成するものとして、御父のペルソナと不可分に結びつけられる。他方ボナヴェントウラは、後に見るように、ペ

ルソナと固有性を同一の面だけでなく同一視しない面からも考え、「自存するペルソナ」の考え方を持ち出さない。トマスは、固有性は「自存するペルソナ」であるとした上で、「能動的な生み (generatio activa) は、御父のペルソナから出てくることとして意味表示されるので、[生むことは] 御父のペルソナの固有性 (proprietas personales Patris) を前提する」と言う⁽¹⁷⁾。すなわち生む働きには、父性を備えて自存する、御父のペルソナが先になければならない。それゆえトマスは「御父であるがゆえに、生む」と主張し、父性を備えた御父が存在せずして、生む働きは生じないと考える。父性を備えた御父のペルソナがまず在り、御父から生む働きが起り、御子が成立する⁽¹⁸⁾。

それに対してボナヴェントゥラは「生むゆえに、御父である」と考え、父の存在を子の誕生以前に前提しないように見える。では父性は、生む働きのどの時点で生じ、御父のペルソナに固有性を付与するのか。ここに、ボナヴェントゥラの見解には大きな問題があると、これまでトマスに限らず、多くの研究者らが指摘してきた。Russell Friedman は「ボナヴェントゥラの問題は、御父が生む「以前」に御父でないなら、一体正確には何が生んでいるのかである」と問うている⁽¹⁹⁾。Friedman の所見によれば、ボナヴェントゥラは「産出／流出 (generation/ emanation)」→「御父／ペルソナ (Father/ person)」→「父性／関係 (paternity/ relation)」の順序で考えている⁽²⁰⁾。その際に「意味的／概念的 (semantic/ conceptual)」に異なる、次の二つの説明がなされていると、Friedman は言う。すなわち、「流出 [発出] の説明 (the emanation account)」と「関係の説明 (the relation account)」である。ただし Friedman によれば、ボナヴェントゥラはこの二つを曖昧にしか区別できておらず、一種の過小評価戦略 (marginalization strategy) によって二つの説明のうち一方を、フランシスコ会の典型では「関係の説明」の方を、過小評価することで解決を図っている。さらに Friedman は二つの説明をより整合的に理解すべく、ボナヴェントゥラが起源としての神自体の「原初性 (primitas)」を、御父のペルソナに結び付けることに着眼する。そして Friedman は、子

を生む以前の御父が「原初の－御父（proto-Father）」、「原初の－存在（proto-being）」——これは Friedman の考案した表現⁽²¹⁾——という状態にあるとし、「関係の説明」を解消して「流出〔発出〕の説明」に一本化させた解釈を提示する。

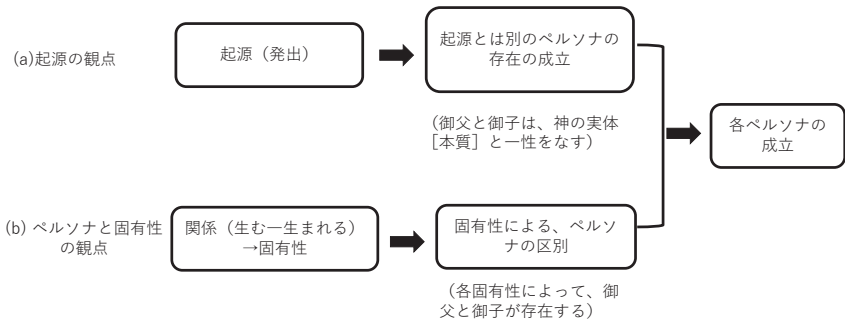
確かに、ある意味で「原初」の状態の御父を認めるという Friedman の解釈は、妥当だろう。事実、ボナヴェントゥラは「非誕生性は、始源（principium）に向かうのと同様に、御父のピュポスタシスへと還元される」と述べ⁽²²⁾、起源〔始源〕の特質を一なる神自体だけでなく、御父のペルソナにも認めている。Friedman が論拠とする次の箇所も、そのスタンスで記されている。

原初性のゆえに、ペルソナは自身から他のペルソナを産出する。私は原初性を「非誕生性（innascibilitas）」と呼び、古代の見解が言うように⁽²³⁾、御父において（in Patere）すべての流出（emanatio）のための「源泉の充実（fontalis plenitudo）」がある⁽²⁴⁾。

ボナヴェントゥラは起源について語るとき、新プラトン主義的な語り口で、トマスよりも饒舌である。起源には「非誕生性」という否定〔欠如〕の側面があると同時に、「源泉の充実」という肯定的な面があり、それゆえに最初の流出〔発出〕が起こる。このような起源の特質を、御父のペルソナも有するとされる。したがって Friedman の用語を借りれば、源泉の充実ゆえに、起源の位置にある「原初の－御父」から、子の発出ないし誕生が生じると言える。

ただ、Friedman の解釈は、些か短絡的に「原初の－御父」を、起源としての一なる神の実体に帰属させただけのように、論者には見受けられる。結局 Friedman は、「一体何が生むのか」という問いに対して、起源の特質をもつ「原初の－御父」が生んだと答えているにすぎない。しかしそれでは、どうしてペルソナ的な固有性が生じ、ペルソナが区別されるのか、との疑問が依

然として残る。Friedman を含め先行研究の不十分さの原因は、(a) 起源の観点と (b) ペルソナと固有性の観点を厳密に区別せず、(b) の観点を過小評価して (a) の観点到一本化させたところにある。そのせいで Friedman は、起源〔始源〕の位置に「原初の－御父」を重ねながら、「産出／流出」→「御父／ペルソナ」→「父性／関係」という、一直線の順序を導き出す。しかし『命題集註解』を精査すれば、明らかに (b) ペルソナと固有性の観点も捨象されておらず、むしろボナヴェントゥラは (a) 起源の観点と (b) ペルソナと固有性の観点を並列させている。そのため、次のような整理が適切であり、各観点はそれぞれ精査されねばならない。



【図 1】

次章では【図 1】の整理に基づき、各観点を詳しく検討する。本章で見たように、トマスは固有性を「自存するペルソナ」として捉え、父性を伴う御父を前提した上でそれが御子を生むと考え、「御父であるがゆえに、生む」と主張していた。この場合、生む働きは、父性を備えた御父であると、容易に解答できる。それに対してボナヴェントゥラが「生むゆえに、御父である」と言うとき、「何が生むのか」という問いが生じるのは尤もだろう。「原初の－御父」や「原初の－存在」とであると解答したとしても、それが単純に起源としての神自体と同じものなのか、それとも何か特殊なあり方をするのか、さらに問題になる。そこでこれまでの過小評価戦略を修正し、(a)

と (b) の両観点からアプローチすることで、より明解な答えを得られるだろう。そのなかで、ボナヴェントゥラが並行的に (a) と (b) の観点を捉えるところに、トマスにはない独自の特徴があることも明らかになる。

4. 起源からの流出／誕生、ペルソナと固有性

4.1 (b) ペルソナと固有性

まず (b) ペルソナとその固有性に関して、ボナヴェントゥラは『命題集註解』第1巻第26区分第1項第2問題の結論で、神において「ペルソナ的な固有性 (*proprietas personales*) は、関係 (*relationes*) でなければならない」と主張し、その関係がどのようなものを、アリストテレスのカテゴリー論に依拠しながら論じている。そこでは、「関係」とそれ以外の付帯性のカテゴリーとの間には、次のような共通点と相違点があるとされる。

第一の条件〔関係とその他のカテゴリーの共通点〕に関する限りで、神において、関係はその他の分類と同様に、存続すること (*manere*) は不可能である。これは最高の単純性ゆえである。事実、神において関係は、カテゴリーでも付帯性でもなく、実体 (*substantia*) である。他方で、対象への関係づけ (*respectus obiecti*) をもつという条件の限り、〔関係は〕何らかの仕方では存続していなければならない。…したがって、〔関係の以外の〕その他の分類は、単純な仕方では〔実体へ〕と転じる (*transire*) が、関係はある仕方では存続しながら、ある仕方では〔実体へ〕と転じる…⁽²⁵⁾。

要するに共通点は、神において「関係」も含めた実体以外のカテゴリーが、「実体」に転じて同一化されるところにある。なぜなら神の実体は、付帯性をもたないからである。相違点として、「関係」のカテゴリーについてのみ、

「実体」へと解消されず残り続ける部分があるとされる。ここにボナヴェントゥラは、三位一体の神において、関係が「ペルソナ的な固有性」であるという論拠を認める。つまり当該の関係、すなわちペルソナ的な固有性は、一方で神の実体と同一化できるが、他方でペルソナ間で成り立つ特質として存続する。したがって、二方向からの見方が指摘できる。一方で、ペルソナとその固有性が神の実体と一性をなすいわば垂直方向があり、他方であるペルソナが他のペルソナと関係することにおいて固有性を保持するという水平方向がある。

この二方向は、第1巻第33区分第1項第1問題で「固有性はペルソナか」が問われる際にも考慮されている。その結論で、ギルベルトゥス・ポレタヌスとブレボシティヌスの主張を吟味した後、ボナヴェントゥラは両者の折衷案をとる。ボナヴェントゥラは、「固有性は、ペルソナであり、ペルソナの中にある。ただし〔固有性は〕、何らかの仕方では異なるもののだが (*proprietas sunt personae, et in personis, tamen aliquo modo differunt a personis*)」と結論づける。前半の「固有性は、ペルソナであり、ペルソナの中にある」との見解は、トマスも支持していたが、ボナヴェントゥラは次のように垂直方向から考察を行う。

次のことはすでに語られた〔第1巻第26区分〕⁽²⁶⁾。〔固有性である〕関係は、基体に対する対応 (*comparatio quam habet ad subjectum*) のゆえに、神において実体へと転じる。それゆえ「御父は父性である」というように、その基体 (*subiectum*) に関して完全に正しく述語づけられる⁽²⁷⁾。

先に規定を確認した通り、ペルソナは、それによって区別される固有性と、基盤となる主体〔ヒュポスタシス〕、すなわち基体で構成される。ペルソナと固有性は、いずれも神の実体と関係づけられる限りで、すなわち固有性がペルソナの基体〔主体〕へと向かう垂直方向から見る限りで、神の実体と同

一である。換言すれば、「御父は父性である」と言うとき、固有性〔父性〕とペルソナ〔御父〕には「実体と本質と主体における一致」がある⁽²⁸⁾。ボナヴェントゥラがこのように言うとき、ポレタヌスを否定しながら、固有性はペルソナに側立する（*assistantes*）のではないと主張する。ポレタヌスの見解を簡潔に言えば⁽²⁹⁾、神の単純性を確保するには、ペルソナの固有性はペルソナごとにのみ成立し、各ペルソナに側立するものとして捉えねばならず、ペルソナと固有性は同一ではないとされた。ここに三神論の恐れがあるため、ボナヴェントゥラはポレタヌスの主張に関心をもちながらも、ペルソナと固有性の関係を側立的には考えない。むしろ、両者と神の実体とを結びつける垂直方向の考察において、実体的な一性を根拠に「固有性はペルソナと同一」で、「ペルソナの中にある」とする。

ただ厳密に言えば、「固有性がペルソナである」場合と「固有性がペルソナの中にある」場合とは、同じではないと考えられる。後者の場合は前者とは違い、神的本質〔実体〕とペルソナ的な固有性が、直ちに同一の性質を含意しないことに着目されている。事実、ボナヴェントゥラは「たとえ固有性が本質（*essentia*）であるとしても、本質は固有性を前提せず、その逆もしかりである。それゆえ本質に適合するものが、固有性にも適合することは帰結せず、逆もそうである」と言う⁽³⁰⁾。ただその場合でも、ペルソナを媒介することで、固有性と神的本質はペルソナの基体〔主体〕において一致するとされる。

〔固有性は〕、基体についても（*de subjecto*）、内属によっても（*per inhaerentiam*）、実体については述語づけられず、むしろそのようにしてペルソナについてのみ述語づけられる。それゆえ、本質と固有性はペルソナにおいて一なるものであり、一方が他方の中にあるのではないから、〔固有性は〕本質について述語づけられる⁽³¹⁾。

ここから、神的本質と固有性はいずれも、ペルソナの基体〔主体〕に内属す

るゆえに一である。この「内属による述語づけ (praedicatio per inhaerentiam)」とは、同一の基体〔主体〕に具体的に内属するもの同士が、主述関係を成立させることである⁽³²⁾。「内属による述語づけ」とは別に、ボナヴェントゥラは識標に関して、基体〔主体〕ではなく形相についての一致として「同一性による述語づけ (praedicatio per identitatem)」を挙げるが、こちらを「固有性がペルソナの中にある」場合に適用していない。「同一性による述語づけ」によれば、「正義は善である」といった、形相に関する抽象的な文章が成立する。しかし「固有性がペルソナの中にある」場合には、神的本質と固有性の一致は、両者がペルソナの基体〔主体〕へ具体的に内属することが考慮された上で言明される。このようにボナヴェントゥラがペルソナを媒介とした当該の一致に関して、Paul Thom も「固有性と本質とをつなぐ二段階の関係 (a two-step relationship connecting the properties with essence)」を経ているという鋭い指摘をしている⁽³³⁾。したがってボナヴェントゥラは明言していないが、「固有性がペルソナの中にある」場合には、「固有性がペルソナである」場合のように固有性がペルソナの基体〔主体〕と一致する先に、神の実体〔本質〕とも一致するという、いわば一直線で垂直な見方をしていない。むしろ「固有性がペルソナの中にある」場合には、ペルソナの基体〔主体〕が、固有性と神の実体〔本質〕が一致するための媒介点として、存在している。当然ながら、ペルソナの基体と神の実体は本質的に別の存在ではないが、ペルソナ的な固有性が神的本質と一致すると言う際には、ペルソナの基体〔主体〕が固有性の内属先として措定されていなければならないのである。

さらに、先の第 1 巻第 33 区分第 1 項第 1 問題の結論では「固有性は、ペルソナであり、ペルソナの中にある」と同時に、「〔固有性は〕何らかの仕方ではペルソナとは異なる」ことも肯定される。トマスは、ペルソナと固有性が概念上でなく分離できるとは、認めていなかった。ボナヴェントゥラはこの結論を、あるペルソナが他のペルソナを対象として関係づけられるという、水平方向での考察によって導き出す。

他方で、対象（*obiectum*）との対応のゆえに、[固有性である関係は]最も真なる仕方で神の内に存続し、ある仕方でペルソナとの違いをしている。これに即して[ペルソナと固有性の]複合（*compositio*）が生じるのではない。むしろ[それが]属するものとの関わり（*respectus cuius est*）によって[ペルソナと固有性の]区別が生じる。なぜなら、複合は固有性と基体（*subiectum*）との対応によって得られるが、区別（*distinctio*）は対象（*obiectum*）との関わりによって得られるからである。…[ペルソナと固有性は]、本質もしくは存在の様態によって（*per essentiam sive modum essendi*）同一だが、関わり方の様態（*modum se habendi*）に関する限りで異なっている⁽³⁴⁾。

固有性は、対象に対する関係づけの様態であり、それによってペルソナが区別される。加えてボナヴェントゥラは、固有性とペルソナは概念や語り方の上でしか区別できないというプレボシティヌスを批判し、両者は実在的に（*realiter/ secundum rem*）異なるあり方をとりながら、神において存続すると言う。実在的なあり方の相違が生じてくるのは、あるペルソナとその固有性が、他のペルソナとの関係づけによって成立する過程においてであると考えられる。

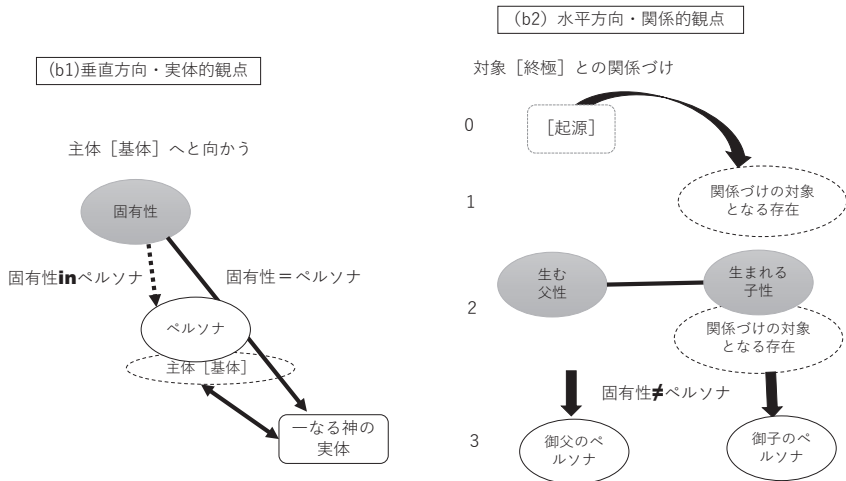
それでは、どのようにして固有性は、対象との関係づけを通して生じるのか。ボナヴェントゥラは、「関係（*relatio*）は、関係づけられるもの（*ipsum qui refertur*）に伴う（*consequi*）。したがって、関係的な固有性（*proprietas relativa*）は、関係づけ（*habitus*）だけを含意でき、このような仕方で[ヒュポスタシス同士の]区別についての理解が出てくる」と言う⁽³⁵⁾。「関係づけられるもの」である対象は、起源[始源]（*principium*）に対して、終極（*terminum*）とも呼ばれる⁽³⁶⁾。関係づけられる対象、すなわち終極が存在する時点ではじめて、関係づけそのものが生じ、その関係を成立させる固有性が認められる。こうして「他者からの者（*qui ab alio*）」すなわち「終極」に相当するペルソナと、「そこから他者が由来する者（*a quo alius*）」すなわち

「起源」に相当するペルソナという、ペルソナの区別が出てくる。したがってボナヴェントゥラは、終極の発生を契機に、固有性が成立すると考えている。勿論、それは発出を通してである——次節で考察するように、ここで (a) の起源の観点の問題になる——が、関係づけの終極が存在してはじめて、各関係項の固有性が決定する。それゆえにボナヴェントゥラは「最初に「[起源から] 生じること (oriri)」があり、他のものから存在するようになるものども (quae habent esse ab alio) において「存在すること (esse)」が理解され、「他のものと関係すること (se ad alterum habere)」が理解される」と述べている⁽³⁷⁾。すなわちここに (0)「起源から生じること」 [= (a)] から、(1)「存在すること」へ、そして (2)「他のものと関係すること」へという秩序がある。この (1)「存在すること」とは、起源に相当する一なる神の実体からの発出の結果、御子と聖霊になるはずの「存在」が発生したことにあたる。具体的に説明すれば、御子となるはずの「存在」が発出を通してその先の終極として成立し、「生む－生まれる」の関係が生じる。そこに、生む者のもつ父性と、生まれる者としての子性が、各関係項に帰属される。そしてそれぞれが、御父のペルソナと御子のペルソナとして区別される。要するに、始点と終極へ固有性が帰属してペルソナが成立するよりも、いわば未詳の終極「関係づけの対象」が起源から出て存在し始めることの方が、むしろ秩序の上で先である⁽³⁸⁾。だからこそボナヴェントゥラは、「生む－生まれる」という秩序の発生に関連して、「[秩序づけられる] 対象において (in obiecto)、[秩序が] 発生したり、消滅したりする」と言うのである⁽³⁹⁾。

ここまでの (b) ペルソナと固有性に関する考察をもとに、【表2】【図2】のように整理できる。(b) は、次の (b1) と (b2) の場合に分けられる。(b1) は主体もしくは基体へ垂直方向に向かって、ペルソナと固有性が神の実体「本質」と一性をなす場合であり、(b2) は発出における始点と終極との、水平方向の関係づけに関わる場合である。

【表2】(b) ペルソナと固有性の観点

(b1) 垂直方向・実体的観点 主体〔基体〕へと向かう	固有性＝ペルソナ 固有性 in ペルソナ	固有性とペルソナは、神の実体と一性をなす。 固有性と神の本質〔実体〕とが、ペルソナにおいて一性をなす。
(b2) 水平方向・関係の観点 対象〔終極〕との関係づけ	固有性≠ペルソナ	(0) [起源から] 発出する。[＝(a)] (1) 関係づけの対象〔終極〕が、発生し、存在を始める。 (2) 「生む－生まれる」の関係において、固有性が成立する。 (3) 起源〔始点〕と終極に各固有性が帰属し、御父のペルソナと御子のペルソナとなる。



【図2】

このように整理したとき、ボナヴェントゥラがペルソナとその固有性の成立を、どのような過程で考えているのかが見えてくる。(b2)によれば、ペルソナの成立の契機は、まず発出が起り、それによって生じた終極が存在し始めるときである。換言すれば、御子となりうるペルソナの「存在」が発出〔産出〕によって生じたことが、御父と御子が特定の者として成立するきつ

かけになっている。発出〔産出〕の方が御父の成立に先んずるという点は、「生むゆえに、御父である」の言明とも矛盾していない。

さらに言えば、(b2)の過程において、ペルソナの「存在」——次節の検討でより明確になるが⁽⁴⁰⁾、これはペルソナの「主体〔基体〕」に相当する——と、それに帰属することになる固有性、すなわち簡潔に言えば、ペルソナと固有性は、区別して考えられている。(b1)の「固有性がペルソナの中にある」場合でも、両者が一致するのは勿論だが、「中にあるもの」と「それを中に入れるもの」との区別が意識されているはずである。それゆえ(b1)では、ペルソナの「存在」を媒介にして、固有性と神の本質が一性をなすと言える。したがって、ボナヴェントゥラは(b)の観点を論考する際、ペルソナの「存在」が発出によって成立することを契機として、そこにペルソナ的な固有性を帰属させ [= (b2)]、同時にそのなかで固有性と神の本質の一性を確認している [= (b1)]。このように(b)の観点によれば、ボナヴェントゥラは西方教会の系譜に属しながらも、ペルソナの区別を必ずしもすべて一性に還元しない姿勢を有していたと考えられる。ここに de Régnon の批判を退けうる可能性がある。

ただ、「何が生むのか」という問題は、依然として残っている。既に第3章で見たように、Friedman の主張の不十分さは、起源としての一なる神の実体の位置に、「原初の－御父」や「原初の－存在」を安易に重ねたところにあった。それでは(b2)の通り、父性の発生が、関係づけの対象となる子性の発生と連関するなら、発出が起こる以前の「原初の－御父」はどのような特質を有するのか。また、御父のペルソナと父性は、一なる神にあたる端的な意味での起源と、まったく同じものとして考えてよいのか。特に【図2】の(b2)について、父性の属する存在〔主体／基体〕に関しては、十分に描出できておらず、さらなる改良が必要である。この解決を目指しながら、次節では(a)起源の観点について検討する。

4.2 (a) 起源の観点

ボナヴェントゥラは、「神的ヒュポスタシスにおいて、私たちは「起源」あるいは「流出」を理解し、さらに「関わり合い」も理解する」と述べる⁽⁴¹⁾。すなわち、一なる神は、すべての流出〔発出〕の起源であると同時に、そこからペルソナの関係が生じる始点でもある。第三章で見た通り⁽⁴²⁾、ボナヴェントゥラはこのような起源のもつ特質を、御父にも認める発言をしている。すなわち、一なる神の実体と御父のいずれに関しても、「非誕生性」、そして最初の流出〔発出〕を起こす「源泉の充実」という特質があるとされる。

しかしボナヴェントゥラがより慎重になるとき、「非誕生性」はペルソナの固有性ではなく、自然本性的な固有性（*proprietas naturales*）だと言うことがある⁽⁴³⁾。その際、端的な起源と自然本性的な固有性に関わる「生まれない者」や「非誕生性」と、ペルソナと固有性に関わる「御父」や「父性」を、別々のグループに分ける。これに関してボナヴェントゥラは、発出の始点と結果という両方向から眺めながら、次のように述べる。

始点の理解もしくは結果の理解に関する限りで、「非誕生的」であることは「御父」であることと、別の関係を含意すると言わねばならない。始点の理解に関する限り、〔非誕生的とは〕欠如の様態で始源（*principium*）に関して意味し⁽⁴⁴⁾、父は位置づけ（*positio*）と産出の様態により、第一の者（*principiatum*）に関する含意があることは明らかである。…結果の理解に関する限り、さほどではないが、同様に〔非誕生のものとは御父は〕異なる。実に、父は子との関係と産出の様態に関してのみ、始源を意味する。他方、非誕生のものは〔御子の〕産出に関してだけでなく、〔聖霊の〕霊発に関しても、…普遍的な第一性（*universalis principalitas*）や発出の源泉的な充実を意味する⁽⁴⁵⁾。

ここからボナヴェントゥラが、一なる神自体にあたる端的な起源と、御父のペルソナとを、必ずしも常に同一のものと考えるわけではないことが解る。その違いの要点は、発出の結果から見ると、端的な起源の場合は、御子と聖霊の両者の発出を含んだ、普遍的な発出のもとになっているところにある。他方で御父のペルソナの場合は、子の産出という特殊な発出に関わり、特殊な発出の始点において父として独自の位置づけを有する。それゆえ、端的な起源としての神の実体自体と御父のペルソナとを比較すれば、前者の方が後者よりも普遍的で根源的な起源である。この相違を前提すると、ボナヴェントゥラが「生むゆえに、御父である」について次のように述べる際にも、端的な起源からの発出〔流出／産出〕が、ペルソナや固有性の第一原因とされていると言える。

事実、本来の理由によれば、生むこと (*generatio*) は流出 (*emanatio*) もしくは起源 (*origo*) を意味し、父性は関わり合い (*habitus*) を意味する。さらに、起源が関わり合いの理由であり、関わり合いが起源の理由ではないことが成り立つ。したがって、生むことが父性の理由であり、逆ではない⁽⁴⁶⁾。

ここでボナヴェントゥラは、御子の誕生のための第一原因は、端的な起源であり、それは父性を前提しないことを示唆している。すなわち、一なる神の実体こそが真の源泉であり、その充実によって発出〔流出／産出〕が起こった結果、ペルソナ的な関係が生じる。したがって「生むゆえに、御父である」という見解について「何が生むのか」の解答は、厳密に言えば、端的な起源である神の実体だということになる。これは、前節の (b) の考察で明らかにした過程にも、適合する⁽⁴⁷⁾。端的な起源こそが、その発出の終極に御子となるはずの存在を、根源的に発生させるのである [(b2) - (0) → (b2) - (1)]。

さらに、起源の位置に置かれた「原初の－御父」には、父性は伴っていな

い——あくまでも可能態 (in potentia) にしかない⁽⁴⁸⁾——と明言できることになる。実際、ボナヴェントゥラは「ペルソナ的な固有性や関係がペルソナに存在 (esse) を与える」と主張する異論に対して、ペルソナの存在の原因は、端的な起源としての神の実体にあるという認識のもとで反論する。そして「神において、父性の創出する者としての性格 (auctoritas) 自体が、その〔御子の〕ヒュポスタシスに到達するのではなく、むしろ「それである (hoc est)」という理由で、そのペルソナの完成 (complementum) を意味する」と言う⁽⁴⁹⁾。つまり (b) の考察の通り、発出の終極に起源とは区別された存在が生じた結果 [(b2) - (1)], 「生む-生まれる」の関係に即して各々が「それである」と特定され、御父と御子として区別されたペルソナが「完成」される [(b2) - (2) → (b2) - (3)]。簡潔に言えば、ペルソナと固有性は、端的な起源からの発出後、各存在の「位置づけ (positio)」に応じて「それである」と特定されてはじめて、「完成 (complementum/ completio)」される⁽⁵⁰⁾。

それでは、発出〔流出／産出〕が起こる以前に「原初の－御父」の「存在」は、どのような状態にあるのか。一なる起源において「原初の－御父」の「存在」が、神の「実体」に一致することは議論するまでもないが、「原初の－御父」の「存在」と神の「実体」とはまったく同一のものとして理解されるのか。ここまでのペルソナと固有性の成立過程に関する考察を踏まえ、『命題集註解』第1巻第33区分第1項第4問題「識標 (notio) あるいは固有性は、それ自身を名づけること (denominare) ができるか」の結論を検討することで、その答えが浮き彫りになる。次の箇所では、ペルソナの「主体」と神の「実体〔本質〕」とが分けて論じられている。すなわち、発出〔流出／産出〕以前のいわば「原初の－御父」の「主体」と、神の「実体〔本質〕」とは区別できる、とのスタンスがとられている。

いかなる識標もそれ自身を名付けられない。理由は次の通りである。
識標の名づけは、現実態としての流出 (emanatio ut actum) を含むた

め、関係 (relatio) もまた含んでいる。なぜなら産出は、本来、形相 (forma) ではなく主体 (suppositum) に属しており、同様に関係は主体としてのあるもの (aliquid ut suppositum) に属する。それゆえこのような名づけはすべて、主体に関わっている。他方、例えば原初のもの、一や真のような、本質的な固有性 (proprietas essentialis) に関してはそうではない。むしろそれは形相に関わり、それ自身を名づける。…一なる本質 (essentia) は一なる実体 (substantia) でもあるから、本質は実体を担っている (supponere)。それゆえ、神性 (Deitas) は神 (Deus) を担っているので、「神性が存在する」は真である。しかしながら、「父性は」御父を担っていないので、「父性が生む」は偽である⁽⁵¹⁾。

端的な起源である神の実体から、御子となるはずの「存在」が生じることは、既に見た通りである [(b2) - (0) → (b2) - (1)]。ただし、この引用箇所では、それがペルソナの関係の視点から眺められていることに留意すべきである。この視点では、発出 [流出／産出] は「主体」に関わるとされる。起源に位置する「主体」から、発出の終極に、すなわち関係づけの対象の位置に、他の「主体」が生まれる。したがって、発出 [流出／産出] 以前の「原初の一御父」は、父性を伴わない「主体」の状態にあると考えられる。他方で発出の終極 [対象] に生じる「存在」は、御子の「主体」となるものにあたる [(b2) - (1)]。

さらに上の引用箇所では、ペルソナの識標や固有性はそれ自身を名づけることができないが、一なる神の実体 [本質] はそれができると結論づけられる。その理由は、識標や固有性の名づけは「主体」に属することに基づいてなされるが、神の実体 [本質] の場合は単純性ゆえに、再帰的にそれ自体で名づけられるからだとされる。例えば、主体にまだ属さない「父性が生む」とは言えないが、神の本質的な固有性である神性について「神性が存在する」、「神の本質は神の実体である」と再帰的に言える。要するにペルソナは、

それ自身だけで他者なくして固有性を備え、別個の主体として在ることができないのである。そのため一貫してボナヴェントゥラは、ペルソナの成立には、発出〔流出／産出〕の終極に他者が在り始めるという、他のペルソナによる契機がなければならないと考えている [(b2) - (1)]。だからこそ同問題の次の異論解答では、ペルソナの場合に再帰的に名づけられない理由について踏み込み、他者の必要性が強調される。

絶対的なものは関わり (respectus) に基盤 (fundamentum) を与え、関わりが完成 (complementum) を与える。しかし関わりがそれ自身に立ち帰る (reflecti supra se) とし、いずれも他者に対する対応 (comparatio) を意味しないので、一方が基盤を与え、他方が完成を与えることができない。それゆえ「関わりはそれ自体で」立ち帰ることができない。それに対して、第一の単純な「諸本質」においては、この類の真理がある。「単純なものは」関係 (relatio) を含まず、それを含むとしても、実体やその固有性を一緒に考慮するような関係を含んでいる⁽⁵²⁾。

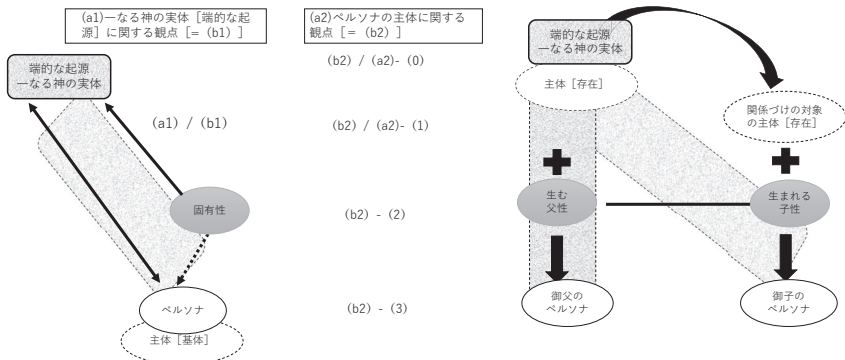
ここでの「絶対的なもの」が与える「基盤」とは、ペルソナ的な関係の視点から見れば、端的な起源——すなわち「原初の－御父」の「主体」の状態——から出た、御子となるはずの「主体」だと解釈できる。復誦するが、この御子の「主体」が他者として発生しない限り、「生む－生まれる」という関係のあり方に即して、固有性が各主体に帰属することはなく、御父のペルソナも御子のペルソナも「完成」しない。それゆえ、ペルソナ同士の関係もその固有性も、再帰的にそれ自身に立ち帰るだけでは成立できず、他者が必要である。他方、神的本質に関しては上述のように、それ自体での立ち帰りが可能だとされる。さらにここでは、神の実体に含まれる関係についても言及されており、これは神の実体とペルソナの関係とが一性をなす場合にも適用できるはずである。ボナヴェントゥラはこの異論解答では明示的に述べて

いないが、前節でも取り上げた⁽⁵³⁾、前問題の結論を前提していると考えられる。その結論では、「関係」のカテゴリーが「実体」のカテゴリーと一致する場合があることが確認されたため [= (b1)]、それならばこの場合には、神がペルソナと一性をなしつつ再帰的に神自身を名づけられることになる。

以上から (a) 起源の観点、(b) ペルソナと固有性の観点とも関連づけられながら、【表3】のように整理できる。またそれに基づいて【図2】を改良すれば、端的な起源、そして御父と御子の関係は【図3】のように示すことができる。

【表3】(a) 起源の観点

(a1) 一なる神の実体 [端的な起源] に関する 観点 [= (b1)]	単純性ゆえに、神の本質 [実体] はそれ自体で一なるものである。 →神の本質 [実体] において、三つのペルソナも一性をなす。 [= (b1)]
(a2) ペルソナの主体に 関する観点 [= (b2)]	(0) 発出 [流出／産出] 御父のペルソナは、現実態として父性をもたず、「主体 [基体]」のみが神の実体と一致している。端的な起源から発出が起こる。[= (b2) - (0)] (1) 発出の終極において、御子の「主体 [基体]」が関係づけの対象として発生する。[(b2) - (1)] [→続いて (b2) - (2) → (b2) - (3) が起こる。]



【図3】

このような整理によれば、ボナヴェントゥラが (a) 起源の観点と (b) ペ

ルソナと固有性の観点を、単純に同一視しているわけではないことは明らかである。確かに、究極的には端的な起源こそがすべての発生の第一原因だとされるため、先行研究の既定路線に即してボナヴェントゥラの三位一体論は「起源」を基軸に展開されると特徴づけても、概ね正しいだろう。とは言え、ボナヴェントゥラは (a) 起源の観点を検討する際にも、(b) ペルソナと固有性の観点を無視しておらず、むしろ (a) と (b) の整合性がとれる構造を追求している。そしてそれを念頭に置いてはじめて、Friedman の提案した「原初の－御父」や「原初の－存在」という在り方の内実を明らかにできる。本節の考察によれば、発出以前の「原初の－御父」は、神的な本質は有しているが、父性は未だ現実的には所有していない主体の状態にあると考えられる。そのため、ボナヴェントゥラの見解「生むゆえに、御父である」に関して「何が生むのか」との問いに対しては、厳密には、端的な起源としての神の実体だと答えることになる。

5. おわりに

本稿の主要な目的は、ボナヴェントゥラの見解「生むゆえに、御父である」が示す三位一体の構造について (a) 起源の観点と (b) ペルソナと固有性の観点の両方から検討し、その緻密な構造を明らかにすることであった。第3章で言及したように Friedman によれば、「産出／流出 (generation/ emanation)」→「御父／ペルソナ (Father/ person)」→「父性／関係 (paternity/ relation)」という一直線の構造をとり、起源には「原初の－御父 (proto-Father)」もまた措定できるとされた。しかしながら本稿の考察によって【表3】【図3】のように、御父からの御子の発出〔流出／誕生〕は、動的で重層的かつ秩序の整った関係構造をなすことが示された。ボナヴェントゥラはこの構造を論考する際に、単に新プラトン主義的な起源からの流出論だけに依拠するのではなく、同時にアリストテレスのカテゴリー論を駆使しながら、特に各々のペルソナがいかにして存在し、その固有性を有するのかに関して

思索を深めている。その成果として、ペルソナ的な固有性の区別が、一性に解消されないような関係構造が提示されている。それゆえ、ペルソナの区別が捨象されているという de Régnon らの批判は、必ずしも妥当ではないと言える。

ボナヴェントゥラが「生むゆえに、御父である」と主張するとき、とりわけ次の三点はオリジナルな見解を導出するための、重要な要素となっているようである。ひとつめはやはり、御子や聖霊を含めたすべてのものが、端的には一なる起源である神自体から発出〔流出〕する、と考えられている点が挙げられる。それによって、トマスのように「自存するペルソナ自体」の考え方をもち出さずとも、堂々と「生むゆえに、御父である」という見解を採れている。二つめは、ペルソナとその固有性が成立する契機は、他者の「存在〔主体／基体〕」が発生したことだとする点である。ペルソナは、他者との関わり合いのなかで、独自の位置づけと固有性を得る。ボナヴェントゥラはその過程を論考しながら、「固有性がペルソナである」場合だけでなく、「固有性がペルソナの中にある」場合や「固有性がペルソナと異なる」場合も検討し、「ペルソナ」ないし「主体」と「固有性」に関して多角的な見方を獲得している。三つめは、神的本質〔実体〕に関してはそれ自体での立ち帰りが可能だとされるが、ペルソナに関してはそれが不可能とされている点である。Paul Thom は有益な指摘を含む研究成果を残しているが、ボナヴェントゥラの三位一体の全体像を描き出すとき、この点を見落としているように見える⁽⁵⁴⁾。

本稿では、ボナヴェントゥラの「生むゆえに、御父である」との見解に関して、起源からの発出〔流出／誕生〕によって御父のペルソナと御子のペルソナが成立するという、三位一体の一側面についてその構造を解明してきた。(a) 起源の観点と (b) ペルソナと固有性の観点の両方から検討することで、ボナヴェントゥラの三位一体論では、神の本質的一性とペルソナの区別とを共に確保するべく、綿密に練られた構造が示されていることが明らかになっただろう。さらにこの側面が、聖霊の発出などどのように関連するのかに

ついては、今後の課題とする。

註

- (1) de Régnon, Théodore (1892/1898), *Etudes de théologie positive sur la Sainte Trinité*, four volumes bound as three, Paris.
- (2) 論者は、アウグスティヌスがペルソナの関係を十分に論考できていないとは、必ずしも考えていない。三位一体自体だけでは de Régnon の批判も妥当であるが、キリスト論や聖霊論という大きなパースペクティブでは、アウグスティヌスもペルソナの関係を考えようとしている。拙論「後期アウグスティヌス思想における神と人間の関係論」(京都大学、博士論文)を参照。
- (3) Cf. Thom, Paul (2012), *The logic of the Trinity: Augustine to Ockham*, New York, pp.91-93.
- (4) Cf. Freidman, Russell L. (2012), *Intellectual Traditions at the Medieval University: The Use of Philosophical Psychology in Trinitarian Theology among the Franciscans and Dominicans, 1250-1350* (Studien und Texte zur Geistesgeschichte des Mittelalters), Leiden: Brill.
- (5) Cf. Cullen, C. M. (2006), *Bonaventure*, New York, p.122.
- (6) 本稿では、特に起源としての一なる神からの最初の発出、すなわち御父からの御子の誕生に焦点を当て、聖霊の発出に関しては別の機会に譲る。
- (7) *I Sent.*, d.26, a.1, q.1, concl.
- (8) Cf. Zachary Hayes (2014), "Bonaventure's Trinitarian Theology," *A Companion to Bonaventure* (Brill's Companions to the Christian Tradition), ed. Jay M. Hammond, J.A. Wayne Hellmann and Jared Goff, Leiden, pp.210-211; 小倉貞秀 (2010), 『ペルソナ概念の歴史的形成：古代からカント以前まで』, 以文社, pp.61-62.
- (9) *I Sent.*, d.23, a.1, q.3, concl.
- (10) 本稿の 4.1 「(b) ペルソナと固有性」を参照。
- (11) *I Sent.*, d.26, a.1, q.1, ad.3.
- (12) Cf. *I Sent.*, d.26, a.1, q.1, concl.
- (13) Paul Thom は、ボレタヌスとボナヴェントゥラとの間の連続性と差異を指摘しながら、ペルソナと固有性の関係について図式化を試みている。Paul Thom が主張するよう

に、ボナヴェントゥラは、ボレタヌスの「quod est」と「quo est」の関係のあり方を、ペルソナと固有性の関係のあり方として認め、自身の三位一体論に取り入れている。ペルソナと固有性の関係について、ボレタヌスがボナヴェントゥラへいかに影響を与えているのかは、今後さらに検討されるべき問題である。その検討へつなげるためにも、ボナヴェントゥラの三位一体の構造を精確に理解することが必要であり、Thom の提示する構造は不十分ではないかと論者は考えている。Cf. Thom, Paul (2014), "Inherence and Denomination in the Trinity," *European Journal for Philosophy of Religion* 6-2, pp.139-153.

(14) トマスの三位一体論に関する詳細な検討は、本稿の扱う範囲を越えるため、別の機会に譲る。トマスの三位一体論については、Gilles Emery らの研究がある。Cf. Emery, Gilles (2010), *The Trinitarian theology of St Thomas Aquinas*, Oxford, ; (2018), *Aristotle in Aquinas's Theology*, Oxford.

(15) *S.T.*, I, q. 40, a.1, ad.1.

(16) *S.T.*, I, q. 40, a.2, co.

(17) *S.T.*, I, q. 40, a.4, ad.3.

(18) Freidman は、トマスの場合の順序を、“paternity then Father then generation; relation then person then emanation”であると言う。Freidman の主張の通り、ボナヴェントゥラの順序とトマスの順序は違う。Cf. Freidman, Russell L. (2012), p.73.

(19) Freidman, Russell L. (2012), pp.79-76.

(20) Freidman, Russell L. (2012), p.75.

(21) Freidman は「原初の－御父 (proto-Father)」や「原初の－存在 (proto-being)」という表現を自分が考案したものだと述べている。Cf. Freidman, Russell L. (2012), p.79, n.65.

(22) *I Sent.*, d.26, a.1, q.3, ad.1.

(23) ここで特定の名前は挙げられていないが、ボナヴェントゥラが起源からの発出を重視するところに、偽ディオニュシオスやリカルドゥスの影響があるとされる。

(24) *I Sent.*, d.2, a.1, q.2, concl.

(25) *I Sent.*, d.26, a.1, q.2, concl.

(26) Cf. *I Sent.*, d.26, a.1, q.2.

(27) *I Sent.*, d.33, a.1, q.1, concl.

- (28) *I Sent.*, d.33, a.1, q.3, ad.3.
- (29) Paul Thom の見解では、『命題集註解』の当該箇所 (*I Sent.*, d.33, a.1, q.1, concl.) でボナヴェントゥラがポレタヌスを誤解している部分があり、ポレタヌスも神性が神にあるのと同様の仕方で、父性も御父の内にあると認める。ポレタヌスに関する詳しい検討は機会を改めるが、少なくともボナヴェントゥラはポレタヌスとは異なり、ペルソナと固有性を神の実体へと結びつけるという方途をとることで、ペルソナと固有性の同一性を確保できている。これにより、ポレタヌスのように三神論に陥ることを、回避していると考えられる。Cf. Thom, Paul (2014), p.114. 注 13 も併せて参照。
- (30) *I Sent.*, d.33, a.1, q.2, ad.5.
- (31) *I Sent.*, d.33, a.1, q.2, ad.3.
- (32) *I Sent.*, d.33, a.1, q.3, concl.
- (33) Thom, Paul (2012), pp.114-115. Thom は「固有性と本質とをつなぐ二段階の関係」があるとの理解に基づいて、「固有性が本質の中にある (the properties are in the essence)」ことについて、“ $A \text{ in}^{**} B$ iff for some $C : A \text{ in}^{*} C$ and $C \text{ est } B$ ” という定理を導き出している。“ in^{*} and in^{**} , which are definable via ab and est ” とされ、 in^{*} と in^{**} は神的本質からの発出 ab と、神的本質とペルソナの一性 est を指す。この Thom の定理とも、本稿の見解は矛盾しないだろう。
- (34) *I Sent.*, d.33, a.1, q.1, concl.
- (35) *I Sent.*, d.26, a.1, q.3, concl.
- (36) Cf. *I Sent.*, d.26, a.1, q.3, ad.1; d.33, a.1, q.2, concl.
- (37) *I Sent.*, d.26, a.1, q.3, concl.
- (38) ここでの前後関係は、当然ながら時間的な前後関係ではなく、あくまで秩序の上で理解されている。
- (39) *I Sent.*, d.33, a.1, q.2, ad.5.
- (40) Cf. *I Sent.*, d.33, a.1, q.4, concl. 注 51 も参照。
- (41) *I Sent.*, d.26, a.1, q.3, concl.
- (42) Cf. *I Sent.*, d.2, a.1, q.2, concl. 注 24 も参照。
- (43) *I Sent.*, d.28, a.1, q.3, ad.2.

- (44) 先の第3章も言及したが、ボナヴェントゥラによれば、「生まれない者」が「生まれない」という否定を含意するところに、欠如のあり方がある。
- (45) I *Sent.*, d.28, a.1, q.2, concl.
- (46) I *Sent.*, d.27, part.1, a.1, q.2, concl.
- (47) 【表2】【図2】を参照。
- (48) Cf. I *Sent.*, d.33, a.1, q.2, ad.5.
- (49) I *Sent.*, d.28, a.1, q.3, ad.1.
- (50) Cf. I *Sent.*, d.28, a.1, q.3, concl.
- (51) I *Sent.*, d.33, a.1, q.4, concl.
- (52) I *Sent.*, d.33, a.1, q.4, ad.1 et 2.
- (53) I *Sent.*, d.33, a.1, q.1, concl. 注27も参照。
- (54) Cf. Thom, Paul (2012), pp.116-117. この三点目は、ボナヴェントゥラがポレタヌをいかに理解しているかとも関連すると予測され、機会を改めて考察したい。

文献表

一次文献

- ・ Aquinas, Thomas (1882-), *Opera Omnia*, ed. Leonina, Rome.
- ・ Bonaventure (1882), *Doctoris seraphici S. Bonaventurae opera omnia, vol. I, Commentaria in Quatuor libros sententiarum Magistri Petri Lombardi*, edita studio et cura PP. Collegii a S. Bonaventura, ad Claras Aquas (Quaracchi).
- ・ ——— (2014), *Commentaries on the First Book of Sentences: On the One and Triune God*, ed. Quaracchi Fathers, Masfield, Massachusetts.

二次文献

- ・ Cullen, C. M. (2006), *Bonaventure*, New York.
- ・ de Régnon, Théodore (1892/1898), *Etud es de théologie positive sur la Sainte Trinité, four volumes bound as three*, Paris.
- ・ Emery, Gilles (2010), *The Trinitarian theology of St Thomas Aquinas*, Oxford.

- (2018), *Aristotle in Aquinas's Theology*, Oxford.
- ・ Freidman, Russell L. (2012), *Intellectual Traditions at the Medieval University: The Use of Philosophical Psychology in Trinitarian Theology among the Franciscans and Dominicans, 1250-1350* (Studien und Texte zur Geistesgeschichte des Mittelalters), Leiden: Brill.
 - ・ Thom, Paul (2012), *The logic of the Trinity: Augustine to Ockham*, New York.
 - (2014), "Inherence and Denomination in the Trinity," *European Journal for Philosophy of Religion* 6-2, pp139-153.
 - ・ Zachary Hayes (2014), "Bonaventure's Trinitarian Theology," *A Companion to Bonaventure* (Brill's Companions to the Christian Tradition), ed. Jay M. Hammond, J.A. Wayne Hellmann and Jared Goff, Leiden, pp.210-211.
 - ・ 上智大学中世思想研究所編訳・監修 (2001), 『中世思想原典集成 (12): フランシスコ会学派』, 平凡社.
 - ・ 小倉貞秀 (2010), 『ペルソナ概念の歴史的形成: 古代からカント以前まで』, 以文社.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 21K12851 の助成を受けたものである。